
ツマにもなりゃしない小噺集

麻戸 槩來

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツマにもなりやしない小嘶集

【Nコード】

N4742V

【作者名】

麻戸 槩來

【あらすじ】

短編にしては短いし、物足りない…？「何事も足りないくらいがちょうどいい」をコンセプトに、思いついたままの状態で載せていきます。——ある日、ある場所の男女の様子、共に覗いてみませんか？※基本恋愛ものに偏るかと思いますが、雑多に載せていこうと考えていますので、よければお付き合ってください。

◇執事とお嬢さまが登場する『私は、すべてを手に入れることは出来ない』をリメイクして公開中です◇

愚かな少女と秀麗な少年（前書き）

今回は、ある日ある場所の男女の会話となっています。

愚かと呼ばれる少女と、秀麗と言われる少年。
相容れぬはずの男女が織りなす会話。

愚かな少女と秀麗な少年

『君はどうしてそんなにも簡単に人を信じるんだ』

「だって信じなければ、誰も信じてくれないでしょう？」

『信じた結果がその様ようだろう？

いい加減に学んだらどうなんだ』

「私はいつも学んでいるわ。

こんなにも今、貴方を愛おしく思えるのだもの」

『それが、そもその間違いだというんだ。こんな奴に惚れて、何が楽しい。

もっと他にいい男などゴロゴロいるだろう』

「私の中では貴方が一番よ」

『いや違う。君の中では俺以外の選択肢を抹消しているだろう』

「それがどうしてダメだというの？ 貴方を知ったら、他の人なんて目に

入らなくなってしまったの」

『君は何もわかつちやいない、俺ほど狡ずるがしこ賢い奴はいないんだ。

君だって例外じゃないんだぞ。蜘蛛のように絡めとって、ジワジワその

綺麗な体も、可愛い顔も全て全て喰らってしまうんだ』

「あら、私を食べたいと思ってくれるなんて嬉しいわ」

『ほら、またそういう事を言って俺を試しているんだろ？

——ああ、食べたいさ。ずっと我慢していたのなんて、お互いに分かって

いたはずだ。』

愚かな少女と秀麗な少年（後書き）

「貴方ほど滑稽な人なんて知らないというのに
みんな馬鹿ね」

『全くだ』

事情も知らず、周りでやいのやいのと囃し立てる人間の
何とも愚かで愛しき事。
表面をのぞいているだけじゃなく、もっと奥まで掘り進めて見なさ
いな。

きつと貴方の隣にいる友人ですら…
貴方の知らぬ、ほかの顔がそこにはあるはず。

最低な片想い（前書き）

今回はちょっと長めですが、細かい設定などは省いている為、こちらに乘せる事にしました。

誤字を直すとともに、タイトルを変更しましたが内容に変わりはありません。紛らわしくてすみません。

最低な片想い

ある日、恐れていた事が起きてしまった。

彼の優しさが、とうとう煩わしくなってしまったのだ。

それを伝えようと、彼はいかにも理解できないと言った表情をした。

「どうして？」

君のために、こんなに頑張ってきたのに……

君が望む限り傍にいてあげるよ」

何も分かっていない彼が、言葉を連ねる。

けれど最早、そのどれも私の心に届きはしなかった。

「頑張ってこられたのが嫌で、嫌でたまらなかったの。

だってそれは私が望んだからでしょう？ 貴方がしたくてした訳ではないので

しょう？ 貴方のためなんかじゃない……ただの同情みたいなもの」

「そんな事ないよ

俺は君の事が心配だっただけ」

「それが同情だっていうのよ

私は必要とされたかったの」

珍しく、私が事細かに説明しているのに、やはり彼は理解できないと言った顔を崩さない。まるで、さも私がおかしい事を言っていると云った様子だ。

「わかんないよ、そんなの…どこが違うの？
我慢しないで俺の前で泣いていいのに」

また、彼は悪魔の様な事を口にする。

あんなにも仲のいい彼女がいて、私の事を女とも思っていない彼の様子に、
本当に苛立つ。

大体、彼の前で不覚にも泣いてしまったのは片手で足りるほどなのに、さも

何でも知っていると云った表情をされるのに、腹が立つ。

——あんたが、私の何を知っているのよ。

「そんなのまっぴらごめん。なぜ自分を理解もせず、置いて行こうとしている

人の前で弱みを見せなきゃいけないのよ」

そう。この男は転勤することが決まり、愛しの彼女を連れて引越しするのだ。

だから、きつと彼と会うのもこれで最後。

「俺はただ

君に優しくしたかったただけなのに…」

まだそんな事を言っている…。

確かに貴方は誰にでも優しい、最高の友人だったよ。

——けれど、叶わない片想いの相手としたら、最悪だった。

何度、隠れて泣いたか貴方は知らないでしょう？

貴方が彼女と、目の前で微笑ましい会話をしている時ですら、私の心は鬼か蛇にじゃでもなった気分だった。

その癖、落ち込んでいると目ざとく見つけて…。

たとえ慰めるためとはいえ、抱きしめるのはやりすぎだよ。

あんたみたいないい男、惚れないと思っているほうが馬鹿なのよ。
だから、もう友人でいる事なんて無理だから、ここで終わりにしよう。

「ねえ

その優しさ、優しくないよ」

どうせなら、
もう期待もできないくらいに、傷つけて…。

最低な片想い（後書き）

優しさと同情の境界線、間違っただのはどちらが先…？

お付き合いいただき、ありがとうございます。

「乱心の勇者様」

「俺が、君を苦しめるものをすべて片っ端から壊していったら
きつと君は怒るよね…」

「何を馬鹿な事を言っているのよ、あんたは仮にも勇者様でしょ」

俺が考えているまま口にしたら、隣にいる少女に怒られてしまった。
何故、あんな屑どもに優しく、俺には厳しいのだろう。

：表面的な作り笑いをされるよりよっぽどいいのだが、もう少し笑
顔を向けて
くれてもいいと思う。

「だってえ。ちょっと利用された俺達でも腹が立つのに、君は家族
を人質に
ずっと脅されているんでしょ」

それを聞いたときは、魔物より先にあいつらの首を落としてやろう
かと考えた

ほどだ。俺のお気に入りに手を出すなど、100年どころか100
0万年早い。

そんな俺の気持ちを知りもせず、彼女は俺に反論する。

「だからって、大した事を私はしてないわよ」

「そうだね。居もしない魔王を倒すため、魔物たちと戦う俺たちの後ろを」

「ちょこちょこ君はついてきたただけだ」

巫女と崇められていても、少し回復魔法が使えるだけで、自身を守ること

すらできない彼女。それでも、神聖なものと国民に思わせて、さらに彼女を利用しようとしているのが分かるのだ。

「ちょっと、あんたケンカ売ってんの？」

「まさか、そんなことしないよ。」

ただ、あまりに君の扱いがひどいと感じただけさ」

?
?
?
?
?
?
?
?
?
?

——だから壊したいと感じただけ

事もなげに言う、この男は何なのだろう。

確かに、悪政だと評判の悪い国王たちの策略で魔物たちを統べるもの。

魔王という存在を作り上げ、恨みをそちらに向けさせている

だからといっても、彼も分かっているように私にはなんの力もないのだ。

それで何かを望めというほうが、酷だと思うのだが…。

私をこんな状況に追い込んだ人間たちに恨みがないとは言えないが、少なく

とも勇者を含め、一緒に旅しているみんなには感謝している。

戦闘では何の力にもならない私を、いつも必死に守ってくれて、過保護と

言えるほど気遣ってくれているのが分かる。

それだけで充分だと思わなければ、きっと罰が当たってしまう。

…だからいいのだ。

「——私は、だいじょうぶよ」

彼がこんな言葉で満足するか分からないけれど、
そう言ってほほ笑むしか出来なかった。

「乱心の勇者様（後書き）」

君は何も分かってない。

俺たちは君が望みさえすれば、この世界だって与えてあげるのに…。

（この湧き上がる衝動を考えたら、一番魔王にふさわしいのは、俺かもしれない）

体に刻みこまれた記憶（前書き）

しばらくパソコンの調子が悪く、作品を投稿できなかったストレスで、昔の作品をあげてみました。その為、他のものと少し作風が異なるかもしれません。※タイトルのみ、変更させていただきました。

体に刻みこまれた記憶

私のまぶたにキスする人はもういない…。

もう、春なんて穏やかなものじゃない。

もう、夏なんてにぎやかなものじゃない。もう秋なんて…。冬なんて…。

日本が誇る季節なんて、もう素敵じゃない。何かが変わったただけで、こんな事を

思うなんて馬鹿としか言いようがない。そんな事は分かってる。

——でも、確かにここに記憶があるのだ。

口下手なあなたの、少し変わった愛情表現であるまぶたへのキスも。些細な事にも激しく動揺してしまうような、愛しい記憶がありありと浮かんで

くるのだ。春は一緒に『春眠暁を覚えず』何て笑いあって、ごろごろ寝転がって

いたよね。夏は慣れない浴衣を着て、一緒に花火を観に行ったよね。

秋は？冬は？あの頃は…。

私はとても臆病で、異国に旅立つ貴方の背中をずっと追いかけるなんてこと

とてもじゃないけど出来なかった。

絵を描いて食べていこうだなんて、夢みたいなことを言うあなたの背中をずっと

信じているなんて…できなかった。

大学で初めて会った時に、私にあなたは死んだ目をしていると言った。

それが今でも忘れられない。

なんて失礼な奴なんだ！というか、そう言う事を初対面の人に言うなんて、人間

としてどうかと思う。——けれど今考えてみると確かに、私はそんな目をして

いたのかもしれない。

屋上の手すりで、空を睨み付けるように眺めていたのだから…。

それでも、あなたには一つ訂正しておかなければならない事がある。私は決して自殺なんて考えていた訳ではなくて、ただ青く広い空が少し憎らしく

なって、睨み付けていただけなのだ。

青くて広くて、何より自由で…。羨ましくってたまらなかった。

そんなやり取りも忘れかけていた頃に、私は一枚のある絵に出会った。

出会ったなんて言うと、あなたは大笑いだと笑うかもしれないけれど、私に

とっただけの衝撃があったのだ。

黒などの暗い色を使っているのに、それは絶望どころか、未来への希望を表現

しているように思えて。：なんというか、今の私にはぴったりだったのだ。

すべての事に絶望なんてしていない。

だからと言って、夢を素直に語れるような心境でも、性格でもない。

それをうまく絵という形で表現してもらったようで嬉しくなった。

名前も一応

チェックしておいた。大学で人を捜すなんて無謀だとは思うけれど、ただ、またこの人の絵を見れたのならば、私は意味もなく幸せになれるだろう

という、奇妙な確信を持ったのだ。

そして、この作者が以前に会った失礼なあなたであると知った時、

私は本気で

落ち込んだ。

今だから正直に認めるけれど、確かに私は少し、運命的なものを夢見ていた

のだと思う。友達にわざわざ聞いてまで捜すのではなかった――。最初は本当にそう思って後悔していた。

そんな私を知ってか知らずか、あなたとはよく顔を合わせていたね。会うたび、会うたび、あなたを意識していた。でも私はそんな自分自身ですら

無視して、分らないふりをしていた。

何といっても、私は今まで自分からちゃんと人を好きになった事になかったのだ。

第一、こんな不器用な優しさしか知らない人を、好きになるなんて思いもしなかった。

——それでも、私の意志など全く関係ないというように、私はあなたに惹かれて

いった。あなたがあの時に告白してくれなかったら、私は何も出来ずに大学も

卒業し、職に就いていただろう。適度に合コンをしたり、恋人が出来たりも

したと思う。

けれど、あなたを想うほどに人を好きにはなれていなかったと思う。

あなたは少し言葉足らずで意地悪だったけれど、しっかりとした意思を持ち、

本当の優しさを知っている人だった。

ただの甘やかしではない、欲しい時にある腕と言葉。

それだけで私は幸せだったのに、あなたはさりとそんな日々を捨ててしまった。

あなたは…あなたの夢をとってしまった。

私の夢は、あなたとでなければ叶えられないものばかりで、あなたの夢は、
私なんていなくても大丈夫で――。

私はあなたが四年の春に、海外に行くと言った時に目のまえが真っ暗になって
しまった。思考も止め、少しでも最低な結末を迎えないように耳をふさぎ。
只管あなたに縋りつくか、罵るかしかなくなってしまった口を動かして続けた。
いた。

辛さと疲労が頂点に達した時、私はもう何もかもを止めてしまった。
…あなたの事は、もう諦めなければいけない。
あなたが海外で成功し、幸せになる事を心から願わなければならぬ。
い。

――例えあなたの隣にいるのが、私でない誰かだとしても。

私の選択の中には、あなたと共に海外にいくという選択肢がなかったのだ。

…いや。もしかしたらずっと気付いていて、わざと無視をしていただけなの
かもしれない。

あなたを信じ切れずに、あなたの事ばかりを責めて私を、とても醜くて汚い

生き物のように思ってしまうよ…。

あなたは夏にはもう海外に旅立っていた。

自分を責めるだけで、話も聞こうともしない私にさぞ嫌気がさしていた事

だろう。

：あなたが居なくなってから聞いたのだけれど、『あの黒い絵』は私に会ってから描いていたのね。

それを聞いた時、私は嬉しくて悲しくて涙を流したよ。

嗚呼、あなたはあの日、私がどんな気持ちでいたのかを理解してくれていた。

口で言うのは簡単だけど、違うやり方でその事を…。『理解している』と伝える
ようとしてくれていたのね。

私はなぜそんな事に気付かずにくってしまったのだろう。後悔…なんて言葉じゃとても足りない。

今でも雑踏の中であなたを捜しているの。居る訳ないのは分かっているのだけ
れど、そうせずにはいられなくて…。

いつか私も、あなた以外の人を愛する日が来るかもしれない。

でも、せめて私のまぶたに残る：あなたの温もりが。決して忘れ去られる事の

ないようにと、願っているよ。だからもう。

私のまぶたにキスする人はもういない…。

体に刻みこまれた記憶（後書き）

不器用なあなたの愛情表現は、いつしかあなたの癖になっていた。「そんなことじゃ誤魔化されない」とあの頃は怒っていたけれど、今は、そんな癖すら愛しくて恋しくて堪らない。ねえ、お願い。

もう一度困ったように微笑んで、私のご機嫌取りをして…？

（叶わぬ願いを、今も捨てられずに私はいる）

いっそ宝箱に僕を閉じ込めて、一緒に燃やしてほしかった（前書き）

こちらは、随分前にある歌に影響されて書いたものです。
突然現れた生きたお人形と、少女の話。

※すみません、暗くタイトルのみ変更しました。

いっそ宝箱に僕を閉じ込めて、一緒に燃やしてほしかった

病気になって、どれだけの事を諦めただろう…？

様々な事を諦めて、羨ましがっていた私の前に現れたあなたは、確かに私の希望

だった。動いたり話したりと不思議なお人形だったけれど、彼は私に多くのものを与えてくれた。

だからもう…此処で開放してあげるね。

『ねえ約束よ。』

私が死んだらほかの誰かを幸せにしてあげてね。

あなたがいてくれて私は本当に幸せだったんだから』

「ぼくがきらいなの？

だからそばにいさせてくれないの？」

『そんな訳がないわ。』

本当にあなたが大好きだったんだから

でも、一緒には連れて逝きたくないの』

———そう、このままでは共に火葬場までついてきそうなんだもの。もう先がない私には、こんな形でしか彼を救えない。

「うそはやめて…。

もうひとつようなくなっただんでしょ？

きみがやさしいのは知っているよ。

——でも、だったらそのやさしさをさいごまでちょうだい」

『それだけは駄目。

いくら大好きなあなたのお願いでも聞けないの。

もう私のことなど気にせず幸せになってね』

「いやだ。

きみがいないところでなんていきたくない。

いつまでもいっしょがだめなら

せめてきみのからだのちかくにずっといさせて」

『そんな事したらあなたの幸せがなくなってしまいうわ。
ほら、いい子だから聞き分けて』

「ぼくはずっときみだけをすきでいるよ」

『…ありがとう、でもねスピーー、』

「あいしつづけてもいいでしょ？」

『……愛しているわ』

そしてまた私は、あなたを縛り付けてしまう…。

病気がちな私にもたらされた、唯一の救いだったのに
助けてくれた恩人であるあなたの事も、私は幸せにする事が出来な
いのね…。

?
?
?
?
?
?
?

やさしいあの娘をこまらせて、ボクはまたひとつ、きたなくなつた。
ずっとボクを…ひたすら、やさしくてかわいいそんざいだと。
しんじつづけたかわいい娘。

きみに独占されるのなら本望さ。

あなたのねがいなら、なんだってかなえてあげたいけど

きみを忘れる、だなんて例えうそでも了承できなかった…。

はかない命と知りながら、どうしても欲しいと無理を言ったのはボクのほう。

動いてしゃべる、きみのような人形であるぼくを、
こころの底から好いてくれたのは、きみだけだった。

いといい、いといいかわいい人

ヒトという存在に、ここまで関心をもったのは、じつは初めてだったんだ…。

今までも、これからも。きっとあなた以外は愛せないから。

永遠につづく時のなか、あなたを想う心は
——きみ自身にすら邪魔させない。

そばにいるよと言ったのに、うそを吐いたのはあなたのほう…

いっそ宝箱に僕を閉じ込めて、一緒に燃やしてほしかった（後書き）

お願い、ぼくを置いて逝かないで…

宝箱に入れているのだから、とても大切なものでしょう？
大切だったら、共に連れて行ってくれるでしょう？

私は、すべてを手に入れる事はできない（前書き）

※こちらは以前短編として掲載していたものを手直ししたものです。
お互いの心情と発言を分けている為、読みにくいかもしれません。
予めご了承ください。

私は、すべてを手に入れる事はできない

「お嬢さまサイド」

十数年と私に仕えてくれた彼の言葉で、唐突に私は理解した。

——そう、わかった。

「もう解放してあげる」

好きな処へ自由に行きなさい。
最後ぐらいは、笑顔で見送ってあげるから。

「今までありがとう」

貴方が私の言うことをきいてくれる度に、二人の距離を見せつけられるよう

で、本当はとても辛かった。

それでも私は。……貴方の傍にいられて幸せでした。
こんなに幸せを感じることは、もうないだろうけど…。

そんなことはどうでもいいの。
これ以上、貴方に嫌われるくらいなら——

こんな関係

「もういない」

〔執事サイド〕

何気ない会話をお嬢さまとしていたはずなのに、彼女に言われた突然の一言で

頭がわきあがるような感覚を味わった。

どうして、そんな事を突然言い出したのか分からなかったが、ある仮説が思い

浮かんだ。

——嗚呼、そうか。君は誰かを愛したんだ。

そうだろう？

だから俺から、逃げようとしているのだろう？

どこか感情の読めない表情が、猶のこと腹が立つ。とても長年仕えていた、

重要な存在に別れを切り出している顔ではないだろう。

「ふざけていらっしゃるのですか？」

君が喜ぶなら、なんだってしてきたし。

この湧き上がる欲望だって、必死に封じてきたというのに…。

君専属の世話係になるまで、俺がどれほど努力したと思っているんだ。

異性という立場では専属の座を勝ち取るのは非常に難しくて。

お嬢さまの護衛兼、世話係ということで、ようやく君の傍にいられるようになった。

なったんだ。

——それなのに、二人の関係が邪魔だって？

馬鹿を言うな。俺という番犬がいたから、君は誰の物にもならず
いたんだ。

数多^{あまた}いる害虫どもを蹴散らしていたのは、他でもない俺だとい
うことを

君が知る訳がないのは分かっているが、さすがにこの台詞には腹が
立つ。

誰が、離れてなどやるものか。

「これからよろしくお願いします」

俺のものにする為に、こんなにも甘やかして…大切に大切に育ててきたって

ことにいい加減気付けよ。

…お陰で本当の主人である彼女の父親には、苦笑されてばかりいたが。

『お前は世間の親馬鹿よりも、よっぽどあの娘を甘やかしているな』
そんな言葉をかけられるのはしょっちゅうだった。

——だが、その主人も今ではないんだ。

身内を亡くし天涯孤独となった君に、俺以外のだれが必要だというんだ。

「貴女には

私だけいればいいんですよ」

私は、すべてを手に入れる事はできない（後書き）

I c a n ' t h a v e e v e r y t h i n g .

訳：私はすべてを手に入れることはできない、どれかは捨てないといけない

すべて、めでたしめでたしという訳にはいかない

以下、本文中の会話のみ

「もう、解放してあげる」

「ふざけていらっしゃるのですか？」

「今までありがとうございます」

「これからよろしくお願いします」

「もういない」

「貴女には

私だけいればいいんですよ」

読みにくい文を、最後まで読んで頂きありがとうございました。
タイトルは、英語が苦手なくせに、辞書から借りてきました。

彼の御方を愛しすぎた娘（前書き）

勝手な考えのもと描いておりますので、不快な思いをした方がいらっしゃるかもしれません。

彼の御方を愛しすぎた娘

ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい
もう近寄りませんから

悪い事などしたいとも思いません
貴方の負担になる事などいたしませんから――
許して下さい：神さま

ああ…どうして。

どうしてあんな仕打ちを受けてまで、逢いたくなるのは貴方だけの
のだろう。

身近な存在であるから、神である貴方を愛した訳ではない。

――生まれてからずっと、私は盲目的にあの御方を愛し続けてい
たの。

普段から、特別あの方に目をかけて戴いていたのは知っていた。私
はそれが嬉し

くて、優しく笑って下さるのに甘え、何時もあの方にくっ付いて過
ごしていた。

そんな私の態度が気に入らなかったのだろう。周囲の反応は冷たい
ものだった。

当たり前だ。博愛の精神を教え、説く御方が最良などしていい訳が

ない。

だから私は、あの御方に優しくされる代わりに彼の周囲の人には馬鹿にされ、

ゴミのような扱いをされていた……。彼の目を盗んでは転ばされ、時にはごみを

頭からかけられたりもした。

もっと酷い事をされたことがあるけれど、今更そんなこと思い出したくもない。

：あの人たちが言うところによると、私の存在は彼にとって邪魔以外の何者でもないらしい。

そう言われる度に何時も落ち込んでいたけれど、そんな言葉をかけられるのは

初めてではなかった。ずっと言われ続けていたから、私だって本当は邪魔なの

ではないかと考えたこともある。

あの方の役に立てたら、少しでも嬉しいと何時も思っていたけれど……私のする

ことなんて所詮いつも空回り。それでも私が傍にいる事で彼が笑ってくれるの

なら、たとえば周囲のいう通りだとしても、それでいいのだと思っていた。彼の

周囲の人にあの事を伝えられるまでは――。

まさか彼自身ですら、私を煩わしいとしか認識していなかったなんて考えも

しなかった。

何時も私に向けてくれていた頬笑みは、本物ではなかったのですね…。

———だけど、ありがとう。

貴方から直接そんな事を言われたら、きっと私は泣いて貴女にすがってしまった

と思うから。せめて最後だけでも、きれいに終わらせてくれてありがとう。

愛しているけれど、誰よりも大切であるけれど…。

私は、もう二度と

貴方の瞳に映らないことを、神に誓います。

彼の御方を愛しすぎた娘（後書き）

『純粋な神様が堕ちる時』と対になっております。

どちらかというと、そちらの方が気に入っているのです、目を通していただけると嬉しいです。

純粋な神様が堕ちる時（前書き）

『彼の御方を愛しすぎた娘』の対になっております。
少々きつい表現をしていますので、お気を付け下さい。

純粹な神様が堕ちる時

あの娘を返せ、誰にもやらん

あれは俺のものだと言っているだろう

うるさい、黙れ

話を聞くのは、あの娘をこの腕に抱いてからだ

愛しいあの娘が地上へ行ってしまった。

最初は何故、そんな事になったのか理解できなかった。

しかし、どうやらあの娘が僕の傍にいと、僕にとって悪影響があると周りが

騒ぎだしたせいらしい。

愛しいあの娘が地上に堕ちた。

何よりも守るべき高貴な僕を汚そうとしたのが罪状らしい。馬鹿らしい事だ。

出逢うまでは感じた事もなかった充足感。今すぐに触れられる距離にいないと

知った時の、恐ろしいまでの飢餓感。

これが穢れているというのなら、人間など塵以下だ。

僕は怒った。

こんな怒りを感じるのは生まれて初めてなほどに頭に血が上り、す

べてが煩わ

しく、且つ憎たらしく思えた。彼女を僕から奪った奴らも、僕から簡単に

離れた彼女へ対してまでも、怒りはとめどなくすべてを呑み込んでゆく。

周りの大馬鹿者たちは、すぐさま楽園から追放してやった。

かわりに僕は従順で、決して彼女を傷付けないだろう奴らを用意した。

もちろん、僕たちが再び戻ってきたときに少しでも邪魔しないように教育してから。

彼女へ対する怒りはもちろん消えることはない。

でも、それはどちらかと言うと、僕の元から簡単に去る決意をした事であって

可愛さ余ってという感情だった。：だから、彼女が二度と傷ついて離れていく

事もないように、細心の注意を払おうと考えたんだ。大体、僕以外の奴が

彼女をいじめていたなんて、本当に我慢できないんだよね。

———なのに：それなのに迎えに来た僕を見て、彼女は驚愕に顔を歪め、僕から

走り逃げた。愛しいあの娘は僕から逃げたから：。

癪に障ったので掴まえて、もう二度と勝手に離れないように天上に連れ帰り、

地上との道を絶ってしまった。

愛しいあの娘が僕を見ない。

だから嫌という程、彼女に対する愛と執着心を叩きつけた。
体にも心にも、決して僕を忘れないように。何時までも僕を求め続
けるよう

にと、願いをかけながら。

——きつとこれで、漸くみんな解ってくれよう。

この狂鬼は、元からこの胸で飼っていたのだと。

純粹な神様が堕ちる時（後書き）

不快に感じる方がいらっしやったらすみません。

知識が浅い私が語るのはお門違いかもしれませんが、悪魔と恋に堕ちるとかなら悪魔あいてがその気になったら大丈夫な気がします。が、神様とは恋は出来ないだろうなーと勝手に考えています。

愛なら大丈夫かもしれませんが、恋をしたなら博愛主義。また、異なるでしょうがフェミニストな人が相手なのは正直つらいですね。何より、周りが許さないのではないかと思います。優しさは心地よいから好まれるけれど、その人が欲や妬み憎しみを誰かに向けていたら、大概の人が嫌悪するのではないかと感じます。

秘めたる想いに終止符を（前書き）

この小説は、作者の浅い知識で綴っておりますのであしからず。
少し前の、日本の片隅で起きた出来事。旧華族×少女の淡い恋物語。

秘めたる想いに終止符を

戦後、ようやく豊かになった頃の事です。

私は友人の妹である、一人の少女に懸想しておりました。この時代は、

まだまだ自由恋愛など珍しく、政略結婚がほとんどの割合を占めており

ました。だいぶ落ちぶれたとはいえ、私も旧華族のせがれ。いずれは私も

例に洩れず、彼女への想いを封じ込めたまま、他の女性と結婚する筈でした。

——例え、燃え盛るほどの熱情を彼女に感じようとも、私は気持ちに蓋をしました。

友人と語らう為とかこつけては、彼女とのささやかな触れ合いを楽しみ。

なめらかな手の動きも、襟足から薫る色気も、蒼い私の性をくすぐりはします

が、それさえも何と甘美な苦しみでしょう。

彼女と添い遂げる事は出来ないかもしれませんが、兄の友人という間柄は、

考えていたよりも私を満足させていました。

しかし、そんなある日こと。

突然友人に、彼女の相手としてふさわしい者を紹介してくれないかと、相談されたのです。

この男も、大概妹を溺愛していますので、そこいらの男に大切な妹を譲る気はないと豪語します。何時もはその通りだと賛成できる言葉ですが、

本格的に

彼女の相手を探すとなると話は別です。

——彼女が他の男と結婚する？

あの白い肌を晒し、別の男に向かって、頬を染める姿を思い浮かべただけで、

私の目の前は真っ赤に染まりました。

他の誰かに、奪われる事を考えた事がないとは言いません。

：けれどこんなにも実感を持って、彼女が他の男に嫁ぐ事を考えた事はありません。

せんでした。

その日は友人の話もそこそそこにお暇し、ろくに彼女の顔も見ずに帰りました。

数日後、意気消沈した私のもとに、何故か彼女から一通の手紙が届きました。

こんな事は初めてです。私は戸惑いを覚えつつも、胸をときめかし手紙を読み進めました。

内容を見て、私は目を見開きました。

彼女の性格を表したような、頭語も綺麗な文字でさえも問題ではありません。

その手紙は、私にとって衝撃以外の何物でもなかったのです。

『挨拶はこれくらいにして、そろそろ本題に入らせていただこうと思います。

初めてお手紙、さぞ困惑なさっていらっしやるのではないでしょうか。

この場をお借りして：私の秘めていた想いを、少し明かさせていた
だこうと思います。
ます。

——私は貴方様に嫌われとうございます。

ただ傍に居させて頂くのは、もう辛いのです。私の事を気遣って下さるのは

分かっております。

それはとても嬉しくもあり、ただし同時に甘い毒のような副作用を
はらんで
おりました。

優しさを感じる度に、貴方様の後ろにある過去の人々を思わずには
いられ

ないのです。きっと、今頃こんな幼い私の事を笑っていらっしやる
ことで

しょう。目の前にいる貴方には何も言う事が出来ないのに、一丁前に嫉妬だけ

は出来る程度に、私も大人になったようです。

兄からも、貴方様がどれほど女性に人気があるのかは聞き知っております。

このように幼い私など、貴方様は何とも思っていないことでしょう。

……こんなことは言える訳がございません。

只、友人の妹という立場であるだけの私には……。

だから今日、婚約が決まった今日という日には、秘めていた想いを、兄の妹と

いう立場をかなぐり捨てて、貴方様に伝えることをお許しください。

愛しています、愛しております。

その瞳に映る事などないであろうことは、十二分に理解しています。それでも、貴方様を想うだけで……涙が止まらないほど嬉しいのです。

勝手なことを申し上げました。お目汚しになる事を心苦しく感じます。

そして、もう二度と友人の妹として会う事はないでしょう事を、嬉しくも

悲しくも感じます。しばらくしたら、きっと笑顔で逢いましょう。

それまでには、何とかこの幼い心も封印して見せますので。』

最初、彼女が何を言っているのか理解することが出来なかった。

けれど気付けば私は友人の家に走り、彼女を貰いうけたいと願い出

ており

ました。

数年後：

「あら、貴方はまたそんな古い手紙を持ちだして…。恥ずかしいからやめて

下さいな」

「書齋を整理していたら、急に見たくなってね。

あの頃はお互い若かったものだ、思い返していたんだよ」

少女のように頬を染めた妻は、年老いてしわが増えた今でも、きらきらと

輝いて見えました。

秘めたる想いに終止符を（後書き）

もう二度と、この止めどない想いを
口にする事を躊躇したりなどはしない。

魔女（前書き）

ふと、童話などを見ていて感じていた事をそのまま綴った形になります。

魔女

「おお、君か！聞いてくれ、私はあの素晴らしき女性と結婚することになった

たよ。君も喜んでくれるだろう？」

その後、彼は勝手な事をずっとしゃべり続けている。

やれ、もっと社交的になった方がいいだの、これからもずっと薬師として協力

してくれだの。幸せのお裾わけだと言わんばかりに、自分の考えを浮かれた

様子で押しつけてくる。

——彼はなににも知らない。何も知りはないのだ。

私が唯の薬師ではなく、皆に忌み嫌われる魔女だという事も。人見知りなので

はなく、人々に恐れられているから彼以外に友人がいないのだという事も。

この…明かす事が出来ないであろう、恋心も。

彼の事もあの女の事も…憎くてしょうがなかった

だってそうでしょう？

あの女は何も努力せず、みんなから好かれて愛されて…大切にされて必要と

されているというのに、どうして努力した私だけのはけ者にされて不幸で

いなければいけないの？

様々な本を読み、様々な医学を学んだわ。

それによって人の殺し方や毒薬についても知識として得てしまったけれど、

人の急所を知っていれば簡単な護身術を教えられるし、毒を以て毒を制すことも

出来るから必要な事だった。

頭の固い人たちから見たら、禍々しい実験をしているように見えるかもしれない

けれど…それは人で失敗しないためだ。動物たちを殺やめるのは心が痛んだが、

動物実験は薬を作るにおいて欠かせない工程だった。

———全ては人の役に立ちたいが為だった。

魔女などと大それた呼び方をしているけれど、私が出来る事など高が知れている。

いつまでも姿形が変わらないと言われているのは、童顔の上に日々健康や美容に

気を使っているからだし。

森に一人住んでいるのは、人と関わるのが少し苦手だからだ。

それだけの事で、まるで『この世の災厄すべてが私のせいだ』という風に言われるだなんて納得できない。

：これは、世間知らずな王子をだまして利用した罰なのだろうか？でも、こうでもしなければ私の薬を多くの人に広めることなど出来なかった。

「君の薬や知識のお陰で、感染症や手のつけられなかった病人が見る見るうちに

治っていくんだ！本当に君は魔法を使っているみたいだな」

嬉々として話す彼の姿は何時もだったら心が温まるものののに、今は冷めた

気持ちで彼をみつめていた。素直な彼は、私の薬や知識を素晴らしいと評価して

くれているけれど、国王や宰相たちが「王子は魔女にたぶらかされているのでは

ないか」と不審がっているから、そろそろ幕の引き時だろう。

今までいた国のように、悪しき力を使うと言われお尋ね者になるのも時間の

問題だ。

：いつ私が空を飛んだのよ。どうやって私が人を呪い殺したのよ。どんな質問をしても誰も答えられやしない。当り前よ、そんな事実はないのだ

もの。人々が畏怖の念に駆られ、噂が噂を呼んだだけ。言わば私は被害者だ。

そんな私を、魔女とは知らずに好いてくれたのは彼だけだったのに……。

ねえ、本当にあんな女のどこが良かったの？

もしかしたら。もっと他の女性だったら私もこうは思わなかったかもしれない。

家庭的だったり、聡明であったり。とにかく私より遥かに秀でているような人

だったら、哀しくはあるけれど受け入れられたと思うのだ。

：それなのに、どうしてよりによって彼女なの？

動物たちに好かれるから、善良な人間なの？

生まれ持って美人だから、愛されて当然なの？

「彼女は神からの贈り物のようだ」

——分らない。

どうしてみんな寄って集^{たか}って、彼女を褒めそやすのかが分からない。

ひび割れ一つない手が、洗濯婦や料理人より気高いの？

裏表のない言葉が、商人や外交官より価値あるものなの？

ねえ、誰でもいいから答えて。

彼女のいいところは、警戒心のかけらもない行動？恵まれた容姿？家事など

した事のない生まれ？知性の感じられない性格？

すべて私は持っていないかった。

警戒しなければ、誰かに搾取され続けるだけだったし、それでは生きてこれ

なかった。容姿など、どれだけ気にかけても元の素材が変わることはない。

貧しいながらに愛してくれた父も、体の弱い母を助けるためにしてきた家事も、

恥じた事など一度もない。

女性が男性と同じく学問を身につけて何が悪いというの？悔しければ、貴方たち

も死に物狂いで勉強すればいいのよ。

「君もきつと彼女を好きになるよ」

どうかお願い。

私が愛しい彼も、憎い彼女の事も手にかけてしまう前に：

誰か私に答えをちょうだい。

魔女（後書き）

某有名な『お姫様が動物たちと何故か会話出来たり、歌いながら踊ったりする話』って、そういうものだとは知っているから違和感ないですけど、知らない人から見たら何だこれ？ですよねっというお話でした。

家族や誰かの為に「荒れた手」を馬鹿にすることも、生きていく為に「腹の探り合い」をする人たちを非難する事も、私はしたくないしすべきではないと感じます。

それなのに、いろいろ恵まれているお姫様が正義のように言われたら、頑張っている人たちは否定されているようで悲しいではないか！…という、考え過ぎの人間でした。

勝手な一人語り、失礼しました。

天邪鬼からの手紙（前書き）

今日は猫の日？ いえいえ、良い夫婦の日ですよ。

天邪鬼からの手紙

『浮気してきます
探さないでください』

深夜にようやく家へ帰りつくと、そんな置手紙が机の上にあった。一瞬きよんとしたが、直ぐに内容を理解して深いため息がこぼれ出す。仕事から帰って来てそうそうにコレはないだろう…。確かに最近妻をかまってやることは少なかったし、挨拶すらまともにしていなかったかもしれない。今日も「早く帰ると」いう約束を破ってしまったって申し訳ないとは思っている。だが、いくらなんでもコレは酷い。

もう一度その置手紙を眺めて、机に戻した。

「…阿呆らし」

ぽつりと呟いて、冷えた飯を掻き込む。机の上には置手紙と共に明らかなる手抜きであろう親子丼が用意してあった。随分前に用意されたそれは卵が少しかたすぎるし、味が濃い。こんな味付けだと「俺を病気にさせて、とっとと第二の人生を楽しもうとしているのではないかと」勘繰りたくもなる。

大体、亭主が帰ってきたのに『笑顔で出迎える』どころか、浮気し

てくるとは何事だ。――そもそも、浮気とはこんな風に亭主に宣言してするものなのだろうか？

世間様の浮気事情など知らないから何とも言いにくいだが、やっぱりうちの妻は少し変わっているのだろう。

照れ症で滅多に甘えたりすることはないくせに、時々こちらの不意を突くように可愛らしいおねだりをしたりする。本心を晒すことが苦手なくせに、こちらがドキリとさせられるような的確なアドバイスくれる。まるで、甘えベタな猫でも飼っている気分だ。

口下手で甘えるのが下手なうちの奥様は、よく意見のすれ違いで癩癩をおこす。

「どうして分からないの!？」

「そんな説明で分かるわけがないだろう!」

というのが、最近家でよく行われる会話だ。

そうすると決まって彼女は黙りこむ。彼女自身、説明が下手なことや言葉足らずな部分を認めてはいるのだ。だからこそ何時も悔しそうに唇をかみしめてうつむく。

本当は、俺の方にも問題があるのは分かっている。彼女と比べると俺は随分鈍いのだ。女心などさっぱりだし、幼馴染である彼女が初恋で全て初体験であるから、普通がどんなものなのかすら分かっていない。

けれども、人一倍自尊心が強い俺は、それを簡単に認める事が出来ない。

それ故、八つ当たり紛れに「どうしてこんな面倒な女と結婚したのかと」自問自答したことなど数知れず。ただ、どれだけ問いかけてみたとしても、結果は決まっている。『惚れたから選んだのだ』という答えしか浮かばないのだ。

：これまで、さまざまなすれ違いを経験してきたが、何とか解決してきたじゃないか。時には歩み寄り、時にはとことん衝突して。それが無駄だったとは言わせない。俺はこれでも無駄なことは嫌いなのだ。――だから、これまで尽くしてきた想いを、時間を。無駄になどして堪えるものか。

例えば、親子丼と共に置かれた野菜たっぷりの味噌汁とおしんこ。時間があいても悪くならないようにとしっかり煮込まれた卵も。こんな些細な部分でもいちいち愛しくてしょうがないのだ。例えば疲れて帰ってきた俺をいたわってくれない薄情な奥さんだとしても。

「さあ、そろそろ食い終わったらし迎えに行くか」

彼女が怒って出ていきそうな場所は、大抵親友の家かもう一か所と決まっている。

彼女の親友は最近結婚したそうだから、こんな遅くまでいるという事はもう一か所の方だろう。車の鍵を持って家を出ようとする、と、図ったようなタイミングで実家から電話がかかってきた。電話がかかって来て安心したけれど、二度も両親から説教を受けるのかと思うとげんなりする。

このタイミングでかかってくるという事は、俺が奥さんの機嫌を損ねたことへのお叱りの電話だ。彼女は何故か、俺自身よりも俺の両親と仲がいい。その為、「家出をするときは家にいらっしゃいと」俺の両親は彼女に言い聞かせている。また、彼女自身もそれに素直に従い、夫婦喧嘩をすると決まって俺は両親から怒られる。

これは有り難くもあるのだけれど、複雑な思いを抱かずにはいられない。

もしもまかり間違って彼女と破局なんて事になれば、あの人たちは俺と縁を切るとでも言いだしかねない。勿論そんなことを認める気はさらさらないのだけれど、流石に彼女自身が匂わせた『浮気』の二文字の効力は強かったらしい。すぐにでも会って謝らなければと、今更ながらに焦ってきた。

俺は急いで花束を持って走り出した。

きつと両親から色々言われるだろうけれど、今日ばかりは短い説教で済むだろう。

……いや、彼女との結婚記念日をやり直すためにも、早々に彼女を攫ってしまおう。

膨れ面で待っているであろう愛しの奥様を思い浮かべ、俺は一人微笑んだ。

天邪鬼からの手紙（後書き）

前書きのにゃんこネタは、どれだけの人に通じるのか分からないので、知らない方はスルーでお願いします。

またまた今日に合わせたいが故に考えたので、何時も以上の雑さになって失礼しました。

雨のなかの温もり（前書き）

昔の作品を、また引っ張り出してきました。
なんだろう…、多分こういう世界観にはまっていた時なんだと思います。

雨のなかの温もり

深夜二時。みさこは何度もお気に入りの映画のワンシーンを繰り返してみている。

暗い部屋の中、何度も何度も頭から毛布をかぶって。薄暗い部屋で、彼女の顔

だけはテレビの光により明るく照らされていた。みさこは私の顔を一度たりとも

見ようとしなかった。ここの所、みさこは泣かなくなった。そのかわり、最近では

大好きな映画を毎晩見ている。――それも同じシーンを、同じ体勢で何度も。

彼が亡くなってから一年経つ。

いい加減前を向いてもいい頃だと思うのに。なんてもまあ人間とは面倒なものだ。

彼に先立たれたというだけの事なのに。みさこは片時も彼を忘れようとはしない。

私だって彼の事は気に入っていたし、命の恩人とも言っていたいいような人だった…。

でも、私はみさこのようにずっと引きずったりはしない。

彼とはみさこの恋人の事で、みさこは彼と私は三人で一緒に暮らしていた。彼は

私の白い毛を撫でるのが好きだった。あとは蜜柑と肉じゃが、それ

からみさこと

一緒にゆっくりしている時間が一番好きだったみたい。

彼はよく、私の事を「みい子」と呼んでいた。そういう時は必ずみさこが

すかさず訂正するのだ。

「前から言っているでしょ？その子の名前はみこよ、みこ！」

「みい子のほうが可愛くていいじゃん」

彼は私を抱きながらそう言うのだ。

みさこは少し怒ったような顔をしながら、それでも幸せそうに笑っていた。そんな

な日常風景が突然がらりと音を立てて崩れた。

彼が亡くなったのは本当につまらない事故だった。

その日は雨で、スリップした車にひかれて亡くなったのだ。…だからみさこは

雨が苦手。雨の日は家に早くかえってきて、夜遅くまで眠れないでいる。

しとしと、しとしと。

今は梅雨なのだから、雨が毎晩のように降ってもおかしくはないのだけれど、

夜遅くまで眠れないでいるみさこを見ると慰めたくなる。

——だってまるで、親に捨てられた子猫のように頼りないのだから。大人と

して面倒を見てやるのは当然のことでしょう？

「みゃあ」

私はみさこに声をかけながら、顔をみさこにすり寄せた。

「……みこ。私、ダメなやつかな？」

「みゃあお（まあね）」

それじゃあ彼に怒られちゃうねと、みさこは呟く。彼は確かに、努力しないよう

な駄目な人間に厳しかった。仕事に関してはまじめで、あの日もみさことの

デートをすっぱかして仕事に行ったため、焦って家に帰ってくる途中だった。

彼女はなお言葉を続ける。

「…でもね、彼の事を忘れたくはないの」

「にゃお（そう）」

「忘れたくはないのよ…」

「にゃあ（そうね）」

私は泣いているみさこの横で丸くなった。ふと、冷たく澄んでいた空気が温かく

なった。かすかに蜜柑の香りもする。きっと、人間には関知できない程度の

些細な差だ。だが、こうも続くと言いたくもなる。

——ああ、また来たのね。あなたも好きねえ。

彼は雨が降ると決まってみさこに会いにくる。悲しみにくれるみさこを抱き

しめて。丸くなっているみさこを、それはそれは愛おしいそうに。しばらく

そうしていると、だいぶ彼女の鳴咽も小さくなってきた。

みさこはやっぱり泣いているけど、優しい声で私に言った。

「……みい子、たまには一緒に眠ろうか？」

彼は嬉しそうにみさこを抱きしめ、私の方をみて笑った。

「にゃあーお（しょうがないわねー）」

私はそう答えて、みさこの後ろから寝室へと入った。

みさこは今日も、泣きながら眠る。でも、その顔はこの一年間に見たどんな表情

よりもきれいな顔だった。：彼は少し、切なそう。でも嬉しそうだった。

みさこが見ている夢にはきっと、彼とみさこ私がいるだろう。

雨のなかの温もり（後書き）

ここまでお付き合いいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4742v/>

ツマにもなりゃしない小噺集

2011年12月29日01時52分発行